

科学研究費成果報告書「近現代日本の政策史料収集と情報公開調査を踏まえた政策史研究の再構築」(基盤研究(B)(1)、代表者伊藤隆平成15・16年度、代表者伊藤隆、課題番号:15330024)より

1. 矢野 信幸氏

やの・のぶゆき 政策研究大学院大学教務補佐

日時: 2003年5月6日

出席者: 伊藤隆 武田知己 小池聖一 中見立夫 有馬学 井上寿一 西川誠
梶田明宏 奥健太郎 村井哲也 黒澤良 松本洋幸 村上浩明 河野康子
季武嘉也 所澤潤 児野道子 清水唯一朗 井口治夫 有山輝雄 西藤要子
鹿島晶子 高橋初恵 佐藤純子

佐道 私は、幹事となっております佐道と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。きょうは、ご案内を差し上げましたように、第1回目の報告者で、私のお隣におります矢野さんに、「木内信胤関係文書について」ということでお話をいただくことになっております。その前に、この研究会全体のことにつきまして、この研究会の代表でいらっしゃいます伊藤隆先生から、この会の趣旨や今後のことなどについてお話しをしていただきたいと思っております。

伊藤 皆さん、こんばんは。私どもの科研費であります、今年も無事パスいたしました。過去3回、2年ずつ、6年間続けていただいたものですから、今回はだめかなと思っておきらめの境地で、しかしまあ、出すだけやってみようということを出しましたら、なんと内定通知が来たので大変うれしく思っております。それで、こういう研究会も始められるということでもあります。

いままでの科研費の成果として、報告書をごらんいただくとおわかりだと思いますが、毎回、史料情報についてのお話をいろいろな方から伺って、その速記録を報告書にまとめてございます。それだけではありませんが、そうやって収集した史料情報をもとに、いま、『近現代日本人物史料情報辞典』というものを編纂しております。この中の皆さんにもぜひご執筆いただいているはずであります。それが500項目を目途として集めてまいりましたが、500項目を超しましたので、近々見本刷りができて、積み残しの部分はあるのですけれども、これは出版社の吉川弘文館と話しをいたしまして、とりあえずまず一冊目を出す。追加情報を、増補という形ではなくて、追加情報としてまたもう一冊つくろうということにいたしました。しかし、主要な人物についてはなるべく最初に出すものに入れたいということで、これから催促状を出そうという考えでいるところであります。

もうひとつのいままでの活動の成果です。これは私どもの大学でやった仕事なのですけれども、皆さんのご協力も得まして、史料実物を収集、整理、目録化ということを始めただけです。既に20くらいの文書群が政策研究大学院大学の史料整理室、これは、きょう報告する矢野氏とか黒澤さんとか、そういう方々のご努力で目録ができつつあるわけです。一部はちゃんと目録と

して刊行いたしました。だいぶたまったものですから、これで研究会をと。いままで続けてきたような史料情報についての一般的な研究会ももちろん続けていきますが、それとは別に、具体的に現在集めた史料をもとにしてやっていこうということでもあります。しかし、これは分量も相当な分量ですし、大きな像をかいていただいても、あちこち像をなでていただいている部分からその事実を報告してくださっても結構ですし、あるいは、それにヒントを得て、何か自分の戦後政治、政治に限りませんが、戦後史についての構想を膨らませてくださっても結構です。あるいは、史料全体を……といっても、例えばきょうの木内の目録をあとでおまわししますけれども、ごらんになられた方はおわかりだと思いますけれども、こういう形になっておりまして、裏表びっしり打ちまして、これだけの厚みがあるわけですから、これを全部紹介しろと……。きょうはまあ、その至難のことを、実際に史料の整理にかかわったということで矢野さんをお願いしているわけですが、これがいちばん多いものですが、しかし、これほど多くないものでも全体を見るというのは大変なんです。そこで、やはり部分からとりかかっていって、皆さんで議論して、まだ私は戦後史について本当に本格的な研究といいますか、研究の枠組みができているとは思いません。もちろん、河野康子さんの最近の著作に見られるように立派な本もありますけれども、みんなが共有できる大きな枠組みというのは必ずしもできていないとは思いませんので、これからいろいろ議論しながらそういうものをしていきたい。これが私の希望であります。

集めた史料全体を一部ご紹介しなければならぬと思いつつ、きょう、実はそのリストをつくったのを忘れてきまして、木内の文書になんで飛びついたのでかということにちょっと触れて、それに変わりたいと思います。

実は、『佐藤栄作日記』の校訂・編纂・刊行をやりましたときに、それを脇で見ていた朝日の記者に、「仕事がおわったのだから、どうもご苦労さんぐらいだけではなくて、何か僕のために奉仕しなさい」といいましたら、「何をしたらいいのですか」というから、「だれか史料を持っていそうな人を紹介しろ」といいました。そうしたら、「だれがいいですか」と向こうが聞いたものですから、僕は、「木内信胤と鈴木喜三郎」といいました。鈴木喜三郎の話はまた別の話ですが、木内の話で。山下靖典氏という人ですが、その山下氏が、「あ、その両方とも遺族が私の親友ですので、今度お引き合わせいたします」と。

しばらくしましたら、あそこのプレスセンタービルの上のほうにレストランがありますが、そこまで何時においでくださいというので、私が行きましたら、そのご遺族たちが集まってきました。集まってきたというのは変ですが、木内さんの息子と、鈴木喜三郎の孫が来ていまして、お互いに、「やあ、やあ」と。初めてです。そこであいさつがありまして、それで私に紹介してくださいました。そこでいろいろお話しをしたら、両方とも、「じゃあ、とにかく探しましょう」と。

木内さんのほうは、実はあると。いろいろな話をしているうちに、私が、「史料のためならば私はどこでも飛んでいきます」といったので、「じゃあ、来てください」と。「どこですか」といったら、「千葉の成田空港の近くです」というので、「じゃあ、どうしましょうか」といったら、何月何日の9時に警視庁の前に来いというものですから、私もちょっと変だなあと思ったのです

けれども、「しかし、9時はちょっと無理です。10時にしてください」といって、10時にしてもらいました。警視庁の前へ行きましたら、ちょうど彼のうちからそこへ行く途中の地点がそこだったものですから、そこでピックアップしてもらって、そのまま車へ乗せられて行って、何という町だったか忘れましたが、そこへ行きました。木内さんは、最後は農村振興といいますか、それを盛んにやっていたわけで、その道場みたいなところに、ダンボールに入ったり、あるいはそのまま積んであったり。その当時の書齋というか、机がそのままあって、机の上がそのままになっている。そういうふうなものがありましたので、このときはしようがない、ざっと見て、「ぜひこれはいただきたい」ということで話しましたら、「いいですよ」というので、「改めてまた伺います。今度は伝票を持って行きますから」と、ヤマトを頼んでおいてもらいまして、私が行きまして箱詰めをして、机の上にあるものも全部、引き出しからも全部引き出しまして、ダンボールに詰めて、全部ベタベタと伝票を貼って、ヤマトの人に來てもらってドーンと送ったというわけなんです。

では、なぜ聞かれたときに木内といったかといいますと、これは世界経済調査会というものに私がちょっと関心があったからなんです。なぜ世界経済調査会かといいますと、これが今度は我々がいま持っている史料とかかかわっているのですが、樺山愛輔の関係文書を樺山家から。これはまた、文藝春秋の人とお付き合いがございまして、これは中曽根談話録をつくったときに一緒にやってくれた古くからの友人であります。この人にやはり同じようなことをいいました。そうしたら、樺山さんを紹介するというので、樺山さんに紹介していただきました。樺山さんと話しをしたら、「皆さんご承知のように、樺山資紀の史料は国会図書館の憲政資料室にあるのですが、あれは一部分です。まだ蔵の中にあります」というので、「それも欲しいのですが、愛輔さんも欲しい」といったら、「両方あります。とりあえず、まず資紀を出しましょう」というので、資紀を出してもらいました。それはいま尚友倶楽部が持っています。これはただ預かっているだけです。いずれこれは、国会図書館の憲政資料室が片割れを持っているわけですから、合併させようと思っております。愛輔さんのほうは、これは尚友倶楽部で預かりました。

私は、尚友倶楽部の人たちに史料というのはいかにおもしろいかという講演を隔月ぐらいでずっとやっておりました。いまは忙しくて、とてもじゃない、そんなことをやっている暇はないのですけれども、二年前ぐらいにそれをやっておりました。そこで、「渡辺武とACJ」という報告をいたしました。また話すときになるのですが、渡辺武さんとは渡辺国武や千冬の関係文書で、これは私のいちばん最初の著作であります『昭和初期政治史研究』のときですから、ずいぶん昔むかしの話であります。渡辺武さんと接触いたしまして、千冬と、そのときに国武さんの史料もたくさんあったので、それも一緒にマイクロ化させてもらいまして、そのとき以来、ときどき渡辺武さんとお会いしていたんです。そうしたら、渡辺武さんが尚友倶楽部の理事になられることになりました。それで、尚友倶楽部で、渡辺武さんの話を聞いておこうじゃないのということになりました。実は、渡辺さんといろいろ話していたときに、まだ『渡辺武日記』が出る前なんです。私がいろいろ話していたら、「占領軍との交渉の記録は全部自分にとっているんだ。日記になっている」という話でありましたので、「いつか見せてくださいよ」「まだだめだ」

と、こういう話でありましたが、中村隆英さんたちがいろいろやって、本になりました。これも僕は非常におもしろくて、ずいぶん使いました。

そのときに、樺山とか関係者の名前がたくさん出てまいります。それに注目をしておりまして、どうもこれは経済調査会とこのグループといいますか、よくいわれるヨハンセン・グループ（吉田反戦グループ）といいますか、これとが非常に密接な関係だなという感じがいたしました。それで、樺山愛輔の史料がどうしても欲しいなと思っておりまして。そうしたら、さっきいいましたように樺山のほうは入った。樺山のほうは、一応、尚友倶楽部で整理したのですが、今回これの事務方をやっていただきます佐藤純子さんが樺山愛輔の通信社関係について興味をお持ちだということで、じゃあ、整理してくださいということで、整理していただいたわけです。その前に実は、私がざっと見まして、自分の興味あるものをピックアップしました。最初、「渡辺武と ACJ」という話をしまして、かなりある程度一般的な話をしたのですが。そのときに渡辺さんから、このションバーガーという人が渡辺さんに宛てた手紙ですね。要するに、彼が、この本とかそのほかの本を書くために取材をしたわけです。そのときの手紙や何かも全部コピーをもらいまして、これはおもしろいなと思っておりまして。樺山文書のなかの ACJ にかかわっているというものです。私も買ったのですが、この『ジャパニーズ・コネクション』という、これもションバーガーなのですが、K・スガハラというのです。これとか、このロバーツとデイビスの『軍隊なき占領』、これのもとになった雑誌に載った訳文がありますね。それなんかも全部渡辺さんからもらいまして、それでその話をしたわけですが。そのときに、実は樺山愛輔に宛てた牧野伸顕の書簡がありまして、それにどうも、あれは昭和 22 年でしょうか、キャッスルから GHQ の中のある人を通して牧野さんに連絡が来ているわけです。これは多分間違いなく、ACJ をつくと。で、日本側でどうのこうのという話なんです。早速これを紹介しようということで、また尚友倶楽部で話をいたしました。

そうしたら、牧野さんの息子がそこにいたんですね。実は、その手紙は牧野さんから樺山愛輔に送っているわけです。ですから、牧野さんのところにキャッスルからの手紙の原文があるはずだ。ぐるっとやり取りしているはずなんだ。国会図書館に行きまして牧野文書を見ましたら、牧野文書は戦後の分はほとんどないんです。ちょっと調べてもらったら、牧野家から買ったのか寄贈されたのかはちょっと忘れましたが、昭和 25 年に受け入れているわけです。まだ占領下なんです。おそらくそれではばかって、占領期のものは入れなかった。それで、いまガーガーいっているのですが、一向に牧野家から応答がないということで私はちょっとイライラしていますけれども。

で、じゃあ、渡辺武さんのほうはどうかというと、これまたいろいろなことがありまして、さっき辞典の話をいたしました。辞典で、私は渡辺国武と渡辺千冬を担当いたしました。その原稿を書いて、渡辺武さんは、私どものインタビューを受けたあと数年たって、もういまはほとんど思考能力ゼロに近い状態になっています。だけど、渡辺武さん宛てに、「あなたのお父さんとおじいさんについてこういうのを書きました。何かご意見があつたら教えてください」ということと。それからもうひとつ、「あなた自身の史料もぜひ見せてもらいたい」という手紙を書きま

したら、娘さんから、「じゃあ、とりあえずお送りしましょう」ということで、1箱史料を送っていただきました。これは村井さんにたしか整理していただいたと思いますが。そのリストをまたお送りしまして、そこに伝票を3枚入れてお送りしましたら、向こうから3箱送ってきました。まだまだあるはずなので。最近、渡辺さんから来ていませんか？ ……そうですか、催促しなければ。占領初期の大蔵省の史料の非常に貴重なものがたくさん入った。もちろんその中に国武と千冬のもも入っていたというふうなことです。いま整理をしてもらっておりますが、次の来るのを待っているわけです。

そういうわけで、矢部貞治さんから始まった史料収集、そういうことでなんとなく形が。私に関心あったのは戦後初期なのですが、そここのところで固まってきて。しかし、木内さんは戦後公職関係にずっと長く勤めて、いろいろな仕事をなさいました。特に外為の仕事というのは彼に始まって彼におわったとっていいだろうと思いますし、そのあとの賠償問題も含めて、非常に大きな仕事をされたわけでありまして。これを、みんなでそれぞれ得意な分野をつき合わせて、みんなで報告をしていこうという狙いでありまして。

一応、この体制としまして、私が代表者でもありまして、幹事役に佐道さん、事務方として武田氏と佐藤純子さんをお願いする。こういう陣容にいたします。いままで科研の事務担当は高橋さんでありましたけれども、高橋さんにももちろん出席していただいて、これからもご協力いただくわけですが、彼女も実は来年3月までこの科研の仕事、科研の仕事といっても、彼女のやっているのは辞典の仕事なのですけれども、これをやっていただいて、来年の4月から他大学に勤務されるということになりますので、これまた、いま代わりを探しているんです。皆さん、適当な方がいらっしゃったら、ぜひご推薦いただきたいと思っております。これはよろしく願いいたします。ぜひ念頭に入れて、いろいろな人をご紹介いただければ幸いです。

研究会としては、そういうふうな形でできれば月に一回くらいやりたいなと思っておりますが、果たして報告者が次々と出てくるかどうかということもあります。

ちょっと思い出すままにいいますと、先ほどいいました樺山文書ですね。それから、木内さん、矢部さん、渡辺さん。この渡辺さんはまだ何も手続きをしておりませんので、勝手に見るといふわけには必ずしもいかない。ほかのものは、かなりの部分は寄贈を受けたり、あるいは寄託の覚書を交換しております。そのほかにいろいろな史料があるのですね。まだ目録ができていないものですから覚書を交換してないのですが、関之という破防法制定当時の公安調査庁の次長で、実際上の事務方のポストだといっていいだろうと思っておりますが、その方の日記を含む膨大な史料を、普通のダンボールでしたら20か30くらいだと思いますが、これもお預かりしております。目下、目録作成中ということでありまして。ですから、皆さんにだんだん、この次には一部リストといいですか、こういう文書がありますよということと、目録を出したのについては目録、それから、覚書を交換したものについては、きちんと製本した目録ではありませんが、目録をお配りしたいと思っております。お持ちの方もいらっしゃると思っておりますが、どうしても欲しいという方は、きょうここに3部あります。ご希望の方はお持ちください。これが1部です。あと2部。というわけで、これからよろしく願いいたします。一応、最初のごあいさつです。

佐道 では、続けて矢野さんのほうから、きょうのメインであります「木内文書について」ご報告お願いいたします。

矢野 それでは、伊藤先生の話を引き継いで報告させていただきたいと思います。これから研究会を始めるにあたって、皆さんの報告のための情報を提供することができればと思っております。なにぶん史料の点数が多いものですから、私もすべてに目を通しているわけではございません。気がついたところを少しご紹介して、だいたいその文書自体がどんな性格のものかということをご容赦いただきたいと思います。内容の詳細に関しては目録を見ていただくしかないと思うので、追いつ追いつ目録をごらんになっていただきたいと思います。

まずレジュメの1番、「文書の受け入れ経緯」というところから少し入っていきたいのですが、先ほど伊藤先生のほうから詳しいお話がありましたので、私のほうでは、受け入れて、そのあとどんな感じでその整理をしたかという状況について少しお話ししておきたいと思います。

1999年8月に、外国為替管理委員会の委員長であった木内信胤のご子息である孝さん、この方は木内の次男にあたられる方なのですが、その方から木内信胤関係の公私にわたる文書を伊藤先生が拝借しました。その後、政策研究大学院大学政策情報研究センターに寄託をいただきまして、その手続きはすんでおります。伊藤先生が成田のほうに行かれて梱包されてきた史料の量なのですが、みかん箱よりももうちょっと小さいくらいの箱で37箱。その後、木内さんのほうから、「こんなものもありますよ」という形で受け入れた史料がありまして、それを1箱に入れて、合計38箱受け入れました。

38箱に関してどんなふうに整理したのかという整理状況なのですが、受け入れた箱ごとに整理の番号をつけまして、箱ごとに担当者を決めて整理をしました。延べ人員で5人かかっております。目録の様式ですが、エクセルを使いまして、箱番号、大分類の番号、束番号、これは史料群の番号と考えて下さい、束の通し番号、箱全体の史料の通し番号を数字で記入いたしました。そのあとに種類、種類というのは、「書類」とか「書簡」とか、大分類のところで設定しましたものを具体的にここに書きました。それに続いて表題、作成者、年代、メモ、そういう列を設けまして、それぞれ入力を行いました。

今後木内さんの目録を見る上で、全体の内容を把握する上で皆さんに知っておいてほしいということは、大分類、種類です。大分類番号の1番が「書類」、2番が「書簡」、3番が「雑誌」、4番が「冊子」、5番が「書籍」、6番が「新聞」、7番が「自筆」、8番が「その他」と、こういう分類をいたしました。だいたいどんなことをイメージされるか、そんなに特殊なものではないので皆さんおわかりだと思うのですが、少し申しあげておきたいのは、書類というのは皆さん一般的な書類をイメージしていただければいいと思います。書簡と雑誌、これもいいと思うのですが、ただ、雑誌と冊子を区別するとき、どちらに入れたらいいのか戸惑うものもありましたので、その点は基準を設けました。内部で発行しているような、一般に販売していないようなもの、形式は雑誌の形をとっているものでも、そういうものは冊子に入れようと。雑誌というのは、流通ルートに乗るような形の、我々が一般的にイメージする雑誌、そういうものを雑誌にしよう。簡単にいってしまえば、そういうふうに分けて分類してあります。書籍に関しては、とくに異論

はないと思います。それから、「新聞」という列を設けましたが、これは原紙、切り抜き、原紙のコピーも含めまして、「新聞」に分類いたしました。7番の「自筆」というところなのですが、これに関しては、この文書の旧蔵者であります木内さんが肉筆で書かれたものです。見ていただければわかるように、原稿とか日記というコーナーがないので、その日記とか原稿に関しては自筆というところに入れてあります。7番までに入らないものを8番「その他」として分類しました。というのは、木内さんの中に若干なのですが講演をされたときのテープがありまして、我々もまだ聞いたことはないのですが、そのような録音されたテープ、写真、その類のものがありましたので、そういったものは「その他」という分類になっています。したがって、まだ完全なデータベースにはなっていないのですが、箱ごとにエクセルで簡単な検索はできますので、例えば木内さんのテープを探そうと思った場合には、コンピューターを操作する場合ですけれども、箱ごとに検索をかけていただいて、「その他」というところを出していただければテープを見つけることができます。

以上のようなやり方で入力作業を進めました。その結果、2001年11月に、とりあえず仮目録を脱稿しようということをつくったのが、先ほど伊藤先生が、「まだ若干残部があります」とおっしゃっていた2001年11月にできた仮目録であります。

伊藤 目録の年代のところ「2001年」というのがありますが、これについてちょっと説明してください。みんながびっくりしますから。

矢野 目録の年代のところ、2001年という表示が出てくる場合があるのですが、実はこれは、年代表記をする場合に年代不詳に関してどうしようかということになりまして、木内さんは1993年に亡くなっていますので、2001年というふうに表示が出てくるものに関しましては年代不詳のものということです。93年に亡くなるまでのものが史料であるということで、年代不詳の場合にはそういう処理でだいじょうぶであろうということを出てきていますので、見る場合にその点にご注意いただければということです。エッというふうに確かにびっくりされると思いますので、ちょっとご念頭においていただければと思います。

あと、詳しい判例とかマニュアルに関しては今回お配りしませんでした。これを説明しますとだいぶ時間がかかりますし、実際に目録を見て史料を見る段階で個別にご相談いただければと思います。

次にレジメの「文書の概要」に入りたいと思います。整理の結果、総点数が1万5,853。そのあとに「2003年5月6日現在」と書いてありますが、これは非常に申し訳ないのですが、2001年11月時点で仮目録という形で打ち出して少しお配りしたのですけれども、とりあえず仮目録をつくろうということを出して、その後若干の人には見ていただいたのですが、データベースにする、あるいは公刊目録として出そうと考えていましたので、その後も修正を続けていました。修正の結果、若干点数がふえたという形になっています。したがって、とりあえずその仮目録で、きょう残部もありますので、欲しい方は見ていただいて、そう遠くないうちにID番号が確定した目録をまた皆さん全員にお配りしようと思いますので、その点にご容赦いただきたいと思いません。

ただし、文書の内容に関しては、きょうこちらに持ってきた 2001 年 11 月現在の仮目録で何があるかということは十分わかると思います。文書整理を始めるに当り伊藤先生にご相談したとき、とにかく簿冊単位でとるのではなくて、簿冊の中のさらに一点一点の細目をとれということになりました。したがって、この目録を見ていただければ、何があるかということはずべてここに出ていると。これ以上小さくできないくらい、極端なことをいうと名刺の一点一点、スクラップの一点一点に関してまでアイテムとしてとってありますので、まずこの目録を見ていただければ何があるかということはおわかりだと思います。最小アイテムの単位をかなり小さいところまでとりましたので、その点では、ちょっと言葉は悪いですが、史料を丸裸にしたといえると思います。

総点数 1 万 5,883 の内訳ですが、次の「分類別資料点数」と書かれたレジユメの資料①の表を見て下さい。先ほど申しあげました、「書類」、「書簡」、「雑誌」、「冊子」などの 8 分類、それぞれの箱にそれぞれの分類の史料が何点あるのか、また文書総点数を書き上げてみました。ざっと見ますと、木内文書、その書類の総点数は、いちばん下を見ていただければわかるように、1 万 5,000 点余りのうちの 7,500 点。つまり半分は書類だということです。2 番目の書簡が 3,047 通です。これだけで既に 1 万点を超えております。木内さんの文書の 3 分の 2 は書類と書簡で占めるということから見ても、かなり内容の濃いものがあるということがおわかりだと思います。それから、「雑誌」、「冊子」、「書籍」、「新聞」、「自筆」ですね。それを合わせまして残りが 5,000 点くらい。その 5,000 点のなかの「雑誌」、「冊子」は、これはあとで説明しますが、例えば外務省がつくった冊子みたいなものとか、木内さん自身が執筆していないものも入っていますが、多くの場合には木内が自分で執筆された雑誌あるいは冊子。木内は自分の書いたものを丹念にとっておくということがどうもあるらしくて、木内自身が書いたものがこの 5,000 点の大半なのではないかなと。まだ中身をそこまで検証はしていませんが、かなり木内さんの書かれたものが入っていると考えていいと思います。特徴的なことというのはそんな感じです。だいたいの箱にどんなものが入っているかということに関しましても追々内容の紹介のところで触れておきますので、全体がこんな感じであるということをお互いの認識としておきたいと思っています。これが文書の概要です。

次に、「文書の内容」に入りたいと思いますが、文書の内容に入る前に、木内信胤の略歴に触れておきます。木内さんの経てきた公職、民間の団体、それにかかわるものが大体入っています。あとプライベートなものも含めて入っていますので、この機会に皆さんと一緒に木内信胤の略歴について確認しておこうと思います。それがお配りした資料②です。木内は外国為替管理委員会の委員長という地位が有名です。もちろんその関係の史料も充実していますが、そのほかの履歴に関する史料もかなり充実しています。この略歴表は、木内のどこに関心を持たれて、どこを見ようかという場合の参考にしていただければと思います。

簡単に追っていききたいのですが、木内は明治 32 年に、お父さん木内重四郎、元京都府知事、お母さんの磯路、この方は岩崎弥太郎の次女ですが、その次男として出生しました。大正 6 年東京高等師範学校附属中学校を卒業、大正 9 年第一高等学校独法科卒、その後高等文官試験に合

格。大正 12 年東京帝国大学法学部の独法科を卒業しました。

学業を修めたのち、大正 14 年に横浜正金銀行に入ります。昭和 3 年、志立鉄次郎、日本興業銀行総裁になる方ですが、この人の次女である多代さんという方と結婚します。なぜこんなプライベートなことを申し上げたかといいますと、木内の奥さんのお母さんという方、つまり志立鉄次郎の夫人タキさんという方は福沢諭吉の娘さんなんです。だから、お母さんが岩崎弥太郎の娘、木内の奥さんのお母さんが福沢諭吉の娘さんという、すごい家系であるということがちょっといたかったということです。結婚後まもなく昭和 5 年に木内は横浜正金銀行の上海支店に転任します。そのあと海外の支店をグルグルまわるわけです。昭和 9 年ハンブルグ支店、昭和 12 年ロンドン支店、昭和 14 年になって本店に帰ってまいりまして、頭取席為替課というところに配属されるわけです。昭和 16 年以降、また大陸のほうに転任になりまして、上海支店に勤務、支配人代理を務める。昭和 17 年南京支店に転任、副支配人。昭和 17 年、ここで興亜院の嘱託・華中連絡部の仕事に携わる。昭和 18 年国民政府全国経済委員会顧問事務所の嘱託、昭和 18 年支那派遣軍総司令部参謀部所属調査部嘱託という形で、本務であります横浜正金銀行以外の、主に陸軍関係の仕事に携わることにもなるわけです。その仕事というのは、上海における通貨工作です。陸軍の依頼で、具体的には駐支那派遣軍の参謀でありました辻政信陸軍大佐の依頼を受けまして、現地の経済政策を立ててくれといわれまして、現地の経済試案というものをつくっています。木内は日本経済新聞に「私の履歴書」を連載しましたので、それによりますと、「日の目をみなくておわった」といっています。ここでの仕事が祟ったのか、後に公職追放に引っかかってしまうということになります。先へ進みますが、昭和 20 年 4 月に本土に帰ってまいりまして、横浜正金銀行総務部長兼海軍省経理局の嘱託になる。昭和 20 年 9 月、終戦後、横浜正金銀行を退職。最終的な横浜正金銀行での地位は総務部長兼調査部長でした。

その昭和 20 年 10 月に、大蔵省の参事官、勅任官です。それから、大蔵省の終戦連絡部長に就任する。これは昭和 21 年 6 月です。当時の大蔵大臣は渋沢敬三です。その渋沢蔵相のもとで戦後の木内さんの経済金融関係の仕事がスタートすることになるわけです。しかし、その後昭和 21 年 9 月に至りまして、一年ぐらいいあまりのうちに公職追放に引っかかってしまう。それが 2 年 5 ヶ月ありました。その間も、昭和 22 年 6 月に日本経済復興協会の専務理事に就任。昭和 24 年 2 月、公職追放が解除されたあとに、行政委員会として成立しました外国為替管理委員会の委員長に就任しました。これが昭和 27 年 7 月。木内が委員長一代限りでおわるわけですが、ここで金融為替関係の仕事に携わることになります。

その後の履歴を追いますと、昭和 29 年日本太平洋問題調査会専務理事に就任、昭和 29 年北海道総合開発委員会委員に就任、昭和 30 年に世界経済調査会理事長に就任しています。昭和 30 年 10 月に日本国有鉄道顧問に就任、昭和 31 年 6 月には国鉄理事に就任しています。昭和 32 年国土開発縦貫自動車道建設審議会委員に就任、当時は岸内閣です。それからあと、昭和 33 年にモンペルラン・ソサイエティという国際的な経済学者の組織に入会をする。昭和 34 年国語問題協議会理事長に就任。昭和 34 年 4 月外務省参与に就任し、昭和 59 年 7 月にいたるとありますが、就任の時期を僕は確認できなかったのですが、実は外務省とのかかわりは、昭和 29 年 12

月に第一次鳩山内閣が成立して外務大臣に重光葵が就任し、その重光外相時代に外務省の顧問に任命される時までさかのぼります。そのあと参与に就任しているのです。その間、昭和 35 年に行政審議会の委員に就任。これは池田内閣のときです。昭和 44 年財団法人三菱財団の理事に就任。昭和 54 年内外ニュースの会長に就任しまして、当時憲法改正ということが非常に問題になっておりまして、内外ニュースとしての憲法改正案を公表するなど、その方面の活動に携わった。昭和 56 年臨時行政調査会の第一専門部会長に就任するのですけれども、まもなくこれは退任にされて、臨調の顧問という形に再就任する。というのは、第一専門部会のなかで実はトラブルとか、いろいろありまして、どうも木内が中で喧々諤々やったのか、顧問という形では残るのですけれども、部会長に就任して数ヶ月あまりでやめてしまうということになります。昭和 59 年 4 月に国語審議会の委員に就任。先ほども申し上げましたが昭和 34 年に国語問題協議会の理事長に就任していますが、木内は国語問題にずっと関心がありまして、これは終戦間もないころではないと思うのですが、昭和 50 年代には入ってからでしょうか、ちょっとあやふやですが、新聞、雑誌等自らの著作については旧仮名遣いですと通すということで、国語問題にかなり関心を寄せておったことがわかります。平成 5 年に享年 94 で逝去されております。

単調で申し訳ないのですが、このような略歴であります。僕は木内文書中の史料も参照しましてこの略歴をつくりましたので、略歴に関する史料は何らかの形で木内文書中にあると考えていただいて結構だと思います。

そこで、具体的に木内文書の内容を見ていきましょう。大雑把に括って見ていこうと思います。まず公職関係に関するものについてはどんなものがあるかということなのですが、「書類」について見るならば、会議のときの配布資料、部内会議での回覧資料、それから報告書、冊子単位のもの、そういったものがほとんどです。しかも、だいたい公職関係の史料に関しましては、これはおそらく木内さん自らだと思えるのですけれども、ファイリングをしてあって、そのファイルに、これは外為関係とか、何々関係というふうに書いてありますので、我々整理するほうとしても、それを一枚一枚めくりながら、そのファイルを史料群として考えましたので、整理はやりやすかったです。したがって、皆さんがご覧になる場合でも、史料としては非常に見やすいのではないかなと思います。

そこで、公職関係の史料について、具体的な内容を紹介しようと思います。まず大蔵省の終戦連絡部関係史料です。

あ、ごめんなさい。木内さんの略歴のあとに、レジユメの「箱別文書概要」というのを飛ばしてしまったので、それを見て置きたいと思います。ちょっと前後してしまい申し訳ないのですが、資料③です。これを見ていただければ、だいたいどの箱にどんな史料があるのかということに関してのあたりをつけていただければと思います。これはここではいちいち読み上げませんので、この中から内容紹介を行なっていくということにしたいと思います。

それでは大蔵省の終戦連絡部関係史料の紹介に移りたいと思います。これが「箱別文書概要」でいうと 1 箱から 16 箱、レジユメの資料③ 1 ページのところですよ。先ほど資料①の大分類別資料点数というところでも、1 箱から 16 箱で書類というふうに書いてあるところの点数を見てい

ただければわかるように、だいたいこの1から16の箱に大蔵省の終戦連絡部関係史料が点在しているということになるかと思えます。大蔵省の終戦連絡部時代のものとして目立つ史料は、これだということで私がピックアップしましたのもう一度レジュメの1ページを見ていただきたいと思えます。金融緊急措置令の制定関係史料についてですが、これは以前に中村隆英先生がこれの関係のことをおっしゃっていたことがこの会でもあったのですが、木内の中にも制定関係の勅令案等があります。木内文書以外に収められている史料と比べていただくといろいろなことがわかってくるのではないかと思います。それから、財閥解体問題の史料です。これもかなりまとまってあります。それから、GHQとの往復文書です。英文の資料、和文の資料も含めて実はありまして、日本政府宛の覚書、英文、和訳、両方あったりする場合があります。それから、大蔵省ではなくて終戦連絡中央事務局、終連の中央事務局の関係史料。それから、連絡調整中央事務局、連調の史料。特に連調中央事務局のほうは政経課の関係がほとんどいいと思います。当然のことながら、GHQのESS、経済科学局の関係の通達、それからこちらから発信したものも入っています。もう一つ、GHQのファイナンス・セクションの関係も多かったような気がします。こんな感じです。

次の外国為替管理委員会関係史料。これもだいたい1箱から16箱、箱別文書概要でいうと1ページのところに散在しているという形になっております。外国為替管理委員会の草創期から解体期に至るまで、中間のバリバリ活動していた時期も含めて、まずまんべんなく史料はあると考えていただいてもいいので、木内一代限りでおわったということもありますけれども、おそらく外為の関係でこれ以上のコレクションを見つけるというのはなかなか難しいのではないかなと思います。どんなものがあるかということで具体的にざっと見ておきたいのですが、外国為替管理令制定関係、草創期の資料ですね。為替管理機構問題、これは草創期、外為の機構ができた以降も事務局を編成替えするとか、そういうものも含めて機構の問題。あと、これはおそらく委員会の設置の関係ですね。これは、起案から決定に至る設置関係の史料があります。それから、これは僕が見た感じなのですが、外国為替管理委員会の議事録と思われるものがかなり残っています。この外国為替管理委員会の議事録が、個人の関係文書で出るのは本当に木内文書くらいのものではないかと思うのですが、議事録はかなり残っています。それから、外資導入問題に関しても史料がかなり残っています。外資に関しては、外為とは別に外資委員会でしたか。並行してあったのか、外国為替管理委員会に吸収されるのかはちょっと忘れましたが、外資委員会の関係の資料もあったと思います。終戦直後の外資導入問題、そういうものに関してはかなり充実していると思います。

それから、大蔵省・外務省関係です。当然、行政委員会として成立した外国為替管理委員会なので、経済関係の大蔵省、外資の問題ということもあって外務省、それからあとは経済安定本部との折衝に関する資料もあるということで、外交、国内経済の各部局との折衝に関する史料は、大蔵省、外務省に限らずあったと思います。したがって、かなり幅広いいろいろなことがこの部分の史料を見ることによってわかるのではないかと思います。

次に、外務省関係というところに入っていきたいのですが、これもだいたい整理した箱でいい

ますと1箱から16箱の中に散在しているということです。だいたい時期的には、先ほどもちょっと略歴のところで申しあげましたけれども、重光葵が第一次鳩山内閣の外務大臣に就任するのが昭和29年の12月です。それから第三次鳩山内閣、昭和31年12月までずっと重光が外務大臣を務めるわけですが、その時期の顧問・参与をしていた時期の関係の資料がかなり充実しているのではないかなど。もちろん鳩山内閣のあとの藤山愛一郎外務大臣の時期、岸内閣のときの史料もありますけれども、かなり重光外相期の資料というものに見るべきものがあるのではないかと思います。

具体的には、見ていけばわかるのですが、東南アジアの開発関係の史料が多いかなという気がしています。まず昭和20年代を中心にして見ていきますと、賠償問題研究懇談会の関係史料。それから、もちろん懇談会以外の、賠償問題の関係史料も1から16の箱に散在しています。昭和20年代から昭和30年代にかけては、東南アジア開発協力、スタッセン会議、アジア・アフリカ会議関係、それからそれに関する木内のメモ、これは顧問・参与としてのいろいろな意見を書いたものだと思うのですが、そういうものも残っています。あと、エカフェです。国際連合アジア極東経済委員会ですか、そのエカフェの関係史料。レジュメには第11回総会関係というふうに書いておきましたけれども、それ以外のエカフェの関係史料も入っています。その関係の重光外務大臣の訓令、それから外務省国際協力局第二課のエカフェに関する史料、そういうものがかなりまとまってあると思います。

昭和20年代から30年代にかけてですけれども、東南アジアの協力問題に関する往復の電信もあります。具体的には、昭和29年12月東南アジア協力問題電信と書いておきましたが、外務省の電信。これに限らず、内部の電信・電報のやりとりはかなりあったような気がします。これはマル秘ということで、いいのかなという気もするのですが、いいのでしょうか（笑）。これは、おそらく外交史料館でも公開していないようなもので、純粋な外務省の公文書にあたるものだと思いますが、木内は顧問・参与をしていましたので、これを参考にして意見をあげてくれということで木内の手元に残ってしまったものだと思います。これはかなりリアルなことがいろいろ書かれていますので、お楽しみだと思います。あと、東南アジア協力関係以外にも、昭和20年代から30年代にかけて、シムラ会議関係の電信があります。これも純粋な外務省の電信です。公文書。これもかなりあります。外務省の史料、アジア局・国際協力局・経済局とレジュメに書きましたが、これは部内で作った冊子です。「木内さん、こういうものをつくりましたのでご参照ください」ということで、表紙に「木内顧問用」なんて走り書きがありまして、それを木内は定期的に送ってもらって参考にし、意見を具申したり、会議で発言していた節があります。そういうものの中にもかなり貴重なものがあると思います。それから、米国余剰農産物受け入れ交渉関係、これは貿易自由化の問題です。木内さんは自由主義経済論者ですけれども、貿易に関しては保護主義。「ケネディ政権の農業政策、対日経済政策はけしからん」というようなことをいろいろな場で発言していた記憶があります。この農産物関係の交渉の史料もかなりおもしろいと思います。あとはアジア・アフリカ会議関係。中国関係の史料は、点数としてはそうたくさんあるわけではないのですが、中には、エッと驚くような日本と中国の要人との会談速記録があっ

たりします。あと、アメリカが打ち出した東南アジア経済協力構想ですか。昭和30年代だと思うのですが、アメリカ側の構想と、それに関する日本側の対応、そのあたりの様子をうかがい知ることができる史料もありました。これは20年代からあったのかな。吉田内閣期からあったような気がします。

昭和30年代に関しましては、レジュメに書きましたが、やはり外務省の東南アジア経済援助関係。アジア・アフリカ会議関係の電信。アジア局の第一課資料、これは部内秘の冊子のようなものです。あと、中国の通商使節関係ですね。昭和30年代に入るとこういうものもかなりふえてきて、この関係の史料があります。日中国交回復に向けての動きが、木内さんの文書を見ていくと、ちょっと見えてくるような気がしますので、その方面に関心がある方は目録をこまめに見られたらと思います。

こんなものではすまないのですけれども、外務省関係はこれくらいでご容赦いただいて、次に各種の審議会関係の史料について、見ておきたいと思います。

これはお配りしたレジュメの資料③箱別文書概要の2ページの部分です。だいたい審議会関係の史料は、箱番号の後半、27箱から29箱、それから36箱、このあたりに審議会の関係史料が集中しています。木内の略歴のところで木内が関与した審議会、委員会等は挙げておきましたのでいちいちそれは申し述べません。それでは具体的に内容を見てみたいと思います。臨時行政調査会の専門委員会の史料。ものによってはかなり部内秘的なものもあるとは思いますが、それよりもかなりいいかなと思うのは、その下の国土開発縦貫自動車道建設審議会、鉄道建設審議会、運輸省海運造船合理化審議会、日本国有鉄道諮問委員会の関係史料です。だいたい昭和30年代以降、高度経済成長期に日本列島のインフラ整備をやる、公共事業をやるという、高度経済成長期のこういった審議会に木内が委員になったりしてしまっていて、その関係の史料がある。これは、例えば、「今度こういう会議をやりますのでご参加ください」という会議の案内から、配布資料、場合によっては、「前回こういうことを決めました」という決定事項に関する史料も中に閉じられていますので、いわゆる書類という性格が強いので、かなり充実していると思います。交通関係の審議会の委員になっていることが多いと思うのですが、これはなぜかという、おそらく間違いのないと思うのですが、実は昭和30年5月から38年5月に十河信二が国鉄の総裁を務めておったわけです。その十河さんと木内さんの関係というのは実は因縁浅からぬものがあります。終戦直後に木内は、一高の3年先輩の平野義太郎に、「おまえ、今度こういう会をやるから出てみないか」といわれました。それはどういう会かという、戦後の日本を、国内経済、それから国際関係も含めてどうしていこうかということの研究するのでおまえも参加しないかといわれて誘われたそうなんです。その会の主宰者が十河信二であったということです。その研究会は、後に木内が主宰者になっていく日本経済復興協会になるということなんです。そういう形で十河さんとはどうも因縁浅からぬものがあつたという関係で、交通関係の審議会の委員にちょっと来いといわれて出て、その関係の史料が残つたということではないかと思います。これはついでのことですけれども、資料③の箱別文書概要の17箱、いちばん上のところに『十河信二伝』編纂関係というのがあります。十河さんの伝記をつくらうという話が昭和60年代に持ち上がったとき

に、かなり木内さんが深くかかわってしまっていて、その伝記編纂の関係の資料があります。これは主にいろいろな人から集めた原稿類です。それがありますので、十河さんとの関係はかなり因縁浅からぬものがあつたのだらうなと思います。その点も史料を見る場合に念頭においておかれたらなと思います。あと、北海道総合開発委員会ですね。やはり開発の関係の史料があるということです。

公職関係からがらっと変わって、民間団体その他の木内さんの関係史料を見ていきましょう。だいたいこれはかなり散在してございまして、7、9、12、32、33箱と、それ以外の箱にも入っていますけれども、主にまとまって入っているのがこの箱であるということで挙げてありますので、そのほかの箱にも関係史料はございます。では、どんな民間団体の史料があるのか。これも略歴のところに書いてありますので、そちらを見ていただきながら、少し解説をしておきたいと思います。

まず何といても横浜正金銀行ですね。これの史料があります。これは、戦前に関しましては、木内さんは頭取席調査課にいましたので、その関係の資料です。特に大陸での経済の動向に関して、横浜正金銀行がずっと部内秘で調査を続けていた報告書が、ある一時期ですけれども、まとまって製本されて冊子になっています。しかし、戦前の横浜正金銀行関係の史料は、意外と少なかったです。もうひとつは大陸での通貨工作に関する史料はほとんどないと思います。これは大陸でやっていますので、残らないというのはそうなのかもしれませんが。僕もすべての史料を整理したわけではないのですが、ほかの方が打たれた目録を見ても、その辺のところの戦中期の史料はなかったような気がします。ただ、終戦直後の横浜正金の清算関係。横浜正金は東京銀行に引き継がれていくわけですが、その清算関係の史料はあります。

先ほど伊藤先生がおっしゃっていた世界経済調査会、それから日本経済復興協会、太平洋問題調査会、これに関する運営関係の史料もございます。これもかなり充実したものです。

財界との関係では、経済同友会、産業計画懇談会、この二つを挙げておきました。経済同友会に関しては、終戦間もないころに木内さんは既に幹事になってございまして、経済同友会の草創期の史料、大会資料、会報などもあります。それから運営関係ですね。これはかなり充実していると思います。それから産業計画懇談会、これは松永安左エ門さんの会ですね。これに木内さんはかなりかかわってございまして、政策提言を行なっております。

木内さんは、終戦直後から農業問題にずっと関心がありまして、昭和21年から全国食糧増産同志会というものにかかわってございまして、ずっと農業問題に関して研究と提言を行なっています。その後、全国新農村建設同志会木内塾という自らが主宰する団体を立ち上げまして、ここでいろいろな研究・研鑽を積んでいます。

それから、モンペルラン・ソサイエティ。ハイエクが会長を務めたことがあるモンペルランの関係史料があります。これは、国内大会、国際大会の案内も含めて。木内さんは国際大会にも頻りに出席されていますので、英文で、「こんな会をやるから」とモンペルランの本部のほうから木内さん宛てにいろいろな紹介やら案内やらが来ていますので、モンペルランの活動をこれによって知ることができるだろうと思います。

木内が関係した民間団体でもうひとつ挙げておいたのは、実はこれは木内さんの晩年ですけども、全国地名保存連盟の会長になっています。これはいまでもときどき批判が出ますけれども、いわゆる町村合併して変な地名になっちゃっていいのか、みたいな話が出ますが、その先駆けみたいな感じで、木内さんは大々的に全国的に地名を保存しろという運動をされて、その会長をやっています。これはおそらく木内さんの個人研究をする場合に少し問題になると思うのです。というのも、全国地名保存連盟の会員の中から、文鮮明の宗教活動に地名保存連盟が利用されることに関して反発が生まれて、木内さん自身は反共主義者ですので、文鮮明とも手紙のやり取りをしたりして、宗教運動を応援する会みたいなのをずっとやっていたのですが、どうも文鮮明がやっている活動は問題があるということで、地名保存連盟の同志の中から批判が出たのです。木内さん自身は反共主義者ですが、文鮮明の運動から手を引いていく背景にはそのような経緯があったようです。その関係の史料も残っていますので、見ていただきたいと思います。

レジュメに、「木内個人」として挙げておいた史料があります。まず、「日記」は残されているのかということですが、日記がないとは申しあげられません。「限定的に残存」と書きましたが、いわゆる日記帳に書かれた日記というのはいまのところ出てきてはいないのですが、便箋とか何かの紙に、一応、「日記」と銘打って、ある限定された時期に何かの活動に関するものがちょろちょろと書かれている。だけど、これを見る場合、見る人が見れば、かなりそれで何か裏付けがとれる場合もありますので注目していただければと思います。具体的には、16箱の中の昭和25年の9月の段階の「日記」と称するものがあります。それから、15箱の中の昭和30年4月に記された「日記」という形で残された史料があります。

「書簡」に関しては、先ほど箱別の点数で見ましたが、3,047通残っています。来簡と発信（控）とあります。相手からもらったものはもちろんのこと、場合によっては自分から発信したものを木内さんは事細かに控を残しておりまして、ありがたいことに、返事が来たら、自分が出した書簡の控と一緒にホッチキスでとじてあったりします。書簡の内容は、もちろん公私にわたる内容。しかも、その手紙に同封されていた送付物、添付物、それから関連資料、例えば、自分の関心があることの新聞記事、雑誌などを一括して保存していたりする場合がありますので、これはかなりおもしろいと思います。

木内の「著作」に関する史料としては、「雑誌」、「冊子」、「新聞」に執筆したもののうち、昭和20年代、50年代のものに関しましては、「論文集」というふうになまえをつけまして、スクラップをしてファイリングしたものが残っています。木内さんが何を書いているかということは、史料整理の際、備考欄に入れましたので、見ていただければわかると思います。それから、日本経済復興協会「速報」、世界経済調査会「世界経済特報」と書きましたが、木内はそれらを自分の意見を発表する場として利用していました。あと、原稿類ですね。自分の草稿類。それから自分が共著としてかかわった本のいろいろな執筆者の原稿、そういうものも原稿類に入っています。

その他木内個人のものとしては、公職追放関係の史料も残っています。

レジュメの最後にあげておいた「雑誌」、「冊子」についてですが、先ほど申し上げた「速報」と「世界経済特報」、これはおそらく所蔵している機関がかなり少ないのではないかと思います。

これは付録のようなものでして、B5版で書かれていて、2～3枚のぺらぺらのものです。「速報」に関しては昭和29年から、「世界経済特報」に関しては昭和33年から残っています。それから、『経済論壇』、『経済復興』、『カレント』、『外国為替』。これは国会図書館等にも所蔵されていますけれども、木内文書にもございます。

特に結論めいたものはないのですけれども、以上、ざっとですけれども、こんな史料の概要になっているということを申し述べました。以上です。

伊藤 どうもありがとうございました。僕は補足的なことをちょっと申し上げます。

木内さんの史料はもともと世界経済調査会の事務所にありました。そこには木内さんの蔵書もあったそうであります。世界経済調査会が、解散ではありませんで、投げ出したときという大変ですが……。実は僕は世界経済調査会を先ほどちょっといいましたようにずっと追いかけていたものですから、この木内さんの前にやったのが澤田節蔵ですね。この澤田のほうも遺族を追いかけてたりなんかしておりました。木内さんとの連絡が初めはわからなかったものですから、現在、世界経済調査会の理事長をやっているのは服部セイコーの服部礼次郎さんでありまして、そこにも訪ねていったのですが、けんもほろろでありました。「木内が散々荒らして、たくさんの借財をつくって放り投げたものを自分が拾ったので、非常に遺憾である。何も古い史料は残っておらん」と、こういう話でありました。やっとな木内さんにたどり着いて、世界経済調査会の史料があったのですが。今度は、木内さんが引き継ぐ前の世界経済調査会の史料がないわけですね。ちょっと残念に思っておりますが。その世界経済調査会にあった木内さんの蔵書は、これはとても持ち帰れないというので、木内さんのお弟子さんという人たちがみんなで分担して持ち帰りました。それはだいたい各大学の図書館に入っております。これは、私はちゃんと聞いたはずなのですが、すっきり忘れて、いずれまた聞けばわかるので、確かめることにしたいと思います。

なぜそんなことをいったかといいますと、史料の中で幾つかのものは、ここに来ないで、大宮に「木内信胤史料館」だったかな、記念館だったかな、というのがあります。これは、前の大宮市議会議長をやっていた方、すぐ人の名前を忘れてしまうので、調べればすぐわかるのですが、その人が個人的にやっている史料館でありまして、アメリカから大型のトレーラーを輸入いたしまして、そのトレーラーハウスを固定しまして、それが史料館になって、そこはかなり大量の木内文書があります。その文書の目録をつくれということを強くいったのですけれども、まだ目録はつくってないようでありまして、また連絡をして、「なんだったら、ちょっとこちに貸せ。そうしたら目録をつくってやるから」というようなこともいつているわけではあります。そこで私が見た主なものは、やはり農村関係が中心であります。雑誌の中で、「世界経済」という世界経済調査会が出していた雑誌がありますね。これはいくらかあるのでしょうか。

矢野 そうですね、いくらかです。

伊藤 これは製本していたようでありまして、実は製本したものが大宮のそこに揃っております。これは木内さんが理事長になる前からの「世界経済」が揃いであります。製本してありましたので、そちらのほうに持っていったのだらうと思います。

先ほど親戚の話をしました。私は系譜をもらいましたが、実に豪華絢爛といえますか、

福沢を中心に……というのは変ですけども。この前、実はその木内孝さんという人、私が史料をいただいた当のご本人は三菱電機の重役をしております、いまはたしか顧問か何かだろうと思いますが、エコロジーみたいな、そういうことで国際的に活躍している方であります。その人に紹介されて、福沢の孫か何かのおばあさんに一度お会いしました。お会いしたところは品川のプリンスホテルの裏のほうのでかいマンションでありまして、そこの中上川といううちでありました。これは例の中上川彦次郎の子孫でありました。そこに福沢の孫娘の方が来てくださいました、昔話をいろいろしてくださった。また、この木内さんからいろいろな方を紹介をされて、私は本当は行かなきゃならないとか、オーラルをしなければいけないというのがたくさんありまして、それでいま苦慮しているというところであります。

先ほど矢野さんは、「横浜正金銀行の戦前関係のものが少ない」といいましたが、私の見たところでは、戦前期の横浜正金銀行の上海支店の、あれは何でしょうね、資料といいますか、それからあの時代の日記がありました。かなりこれは役に立つのではないかという感じがいたしました。あと、日本太平洋問題調査会については、矢部（貞治）さんの文書の中にも多少ありまして、これは解散するところまでたしかあるのですね。ありませんでしたか。

矢野 矢部さんのほうですか。

伊藤 いやいや、木内さんのほう。

矢野 あったと思います。

伊藤 これは最後に解散するわけですけども、解散事務に関してもあったように思います。それから、日本経済復興協会にかなり早くから関係していたのですね。この日本経済復興協会の機関誌が昭和 29 年からしかないというのは非常に残念なのですが、もしかしたらその大宮のほうにあるのかなという感じもするのです。これは製本してありましたか。なかった？

矢野 製本というか、木内さん自身がファイルにして。要するに、この 101 号から残っているというのは、どうもこの号から木内さんが担当したということらしいのですね。

伊藤 でも、その前から専務理事だから、この人の性格からいったらとっているはずなのです。101 号からというのは非常にきりがいいから、100 号までを製本してあって、ということではないかと僕は推測していますので、やはりこれは大宮か、あるいは図書としてどこかに引き取られたのではないかという感じがしているわけです。実はこの日本経済復興協会というのは、これは戦後すぐにできたシンクタンクとしては非常にいろいろな活動をしている団体でありまして、僕は、昭和研究会、国策研究会という戦前のシンクタンクに非常に興味を持っていたわけですが、戦後のシンクタンクとしてこれにいちばん強く興味を持っています、木内さんとの関連がわかっておりましたので、木内文書のときにこれも期待のひとつではあったわけです。

それから、木内さんは国語問題協議会というものの理事長をやっております。この国語問題の理事長ということと、それから木内塾ですか。

矢野 全国新農村建設同志会木内塾。

伊藤 ええ。そういう木内さんをご生存中からずっとやっていた集まりがありまして、それは木内さんが亡くなってからも会合は続けているわけです。それで、木内孝さんから紹介されて、私

もその会のメンバーになっているんです。その会で、木内信奉者というのがいかに熱烈な存在であるかということがよくわかります。私が、「実はこれを整理するためにはお金が必要です」といいましたら、募金をしてくれました。100万円くらい、皆さんがそれぞれ10万円とか、5万円とか、1万円とか寄付してくださいまして、それが私の大学の私の委任経理金になっております。それをこの研究会のために活用することができる。ただしその人たちは、「木内研究をやって、やはり木内の伝記をつくってほしい」という希望がありますので、いずれ木内をあちこちからつついて伝記を書きたいと思っているわけです。

木内さんは、さっき矢野君がいましたように、『十河信二伝』というのをつくりました。私はその会合に行きまして、いま私が何をしているかという話をいたしました。木内さんをはじめ、いろいろな史料を集めているということをおいしましたら、「実は私、十河伝をつくるときに十河さんのお宅にある史料を整理したんです」という女性がそこにおりました。もちろんそれはうら若い女性ではありません。その人に、「実はいま、こういう辞典をつくっているので情報が欲しいのだ」ということをいいましたら、いま一所懸命調べてくれているそうであります。これは東大経済学部の、もう退官されましたが、原朗先生がお書きくださることになっているのですが、あの先生は大変筆がおそいので、まだお書きくださっておりません。その方から情報をもったら原先生のほうにまわしてほしいというので、それが一種のプレッシャーになって、きっと書いてくださるだろうという期待を持っているわけです。

いまお話があったように、いろいろなところからつけば、木内さんは本当にさまざまな問題にかかわっている。これは多少矢部さんとクロスするところもある。やはりシンクタンクみたいなところはいろいろな形でお互いにかかわっておりますので。矢部さんの目録は、まだ予備がございませうか。

武田 まだ500部くらいあります。

伊藤 そうですか。皆さん、欲しいとおっしゃる方は、おっしゃっていただければ差し上げますが、送料がありません。受取人払いの伝票を自分でつくって送ってくだされば、お送りしてもいいということでもあります。

矢野 かなりかさむと思うのですが。

伊藤 相当重いんです。

矢野 一冊が厚いので。

伊藤 先ほど申しましたように、樺山さんとか、渡辺さんとか、それぞれ関連する史料もありますので、この研究会でどんどん広げていきたい。また、いまもお史料収集をやっております。戦前期のものもだいぶいろいろ集めておりますし、戦後新しいタイプのものも集めておりますので、多分、先ほどちょっと矢野さんがいましたように、マル秘というので、もしかしたら外務省から横槍が入るのではないかと思われるものもかなりありますし、公安調査庁あたりからクレームがつくのもあるだろうと思っておりますが、「出ちゃったら勝ちだ」と、こういう精神でいきたいと思っております。私は外務省の職員ではありませんので、秘密漏洩の罪で問われることはないというふうに思います。これはまあ、木内さんは処罰されるかもしれませんが、もう亡くなっ

ておられますので処罰の対象にはならないだろうと思います。

実は、海原治さんですね。これもちょっといまのこの話と関係があるのですが、昭和 25 年に渡辺武さんとか澤田（廉三）さんとかと一緒に海原さんもダレス国務省顧問と会ってやっているわけです。『渡辺武日記』に詳しく出てくるわけです。この『軍隊なき占領』という本を見ますと、海原治というのは大変な再軍備論者で、そちらのほうのボスらしいのですが、実は海原治という人は私どものオーラルをやりまして、冊子ができております。オーラルヒストリーのホームページで、オーラルをやったものの中でいったい何を出しているのか。残部がありましたらお配りします。その中に海原さんも入っております。海原さんのオーラルの後ろに、海原さんからもらったのかな、借りたのか、マル秘という防衛庁の資料を入れました。そうしたら、防衛庁史編纂室から、「まだ秘が解けていないものを勝手に出してどうということなの」ということをいわれたらしい。そういう噂は聞こえましたが、正面きって抗議は申し込んできませんでしたので、これは既成の事実になっている。しかも、この前、海原さんのお宅に伺いまして、かなり強引にとってはあれなのですが、海原さんの家を家宅搜索のような形で搜索をいたしまして、まだ実は隠していると思うのですが、ある程度マル秘と書いた資料などももらってきて、整理をしてもらっておるところであります。海原さんもこういう一連のかかわりにみんなかかわってくる、そういう中にありますので、その資料もちょっとおもしろいのではないかなと思っております。ちょっと余分なことを付け加えました。

佐道 皆さんのほうからご質問とかがあればどうぞ。

中見 よろしいですか。私はこの木内信胤を知っているものですから。丹念に整理されている字は、木内さんご自身のものだと思いますか。

矢野 字ですか。例えば、自筆のものということですか。

中見 いや、ファイルが非常に完璧だという。

矢野 それは、我々も木内さんの字、書簡、特に自筆の原稿がばさっと出てきて、署名がなかったりするので、木内さんの字はこういう字かなということはかなり見まして、木内さんご自身が書かれているとはっきり思われるものと、そうではない、複数が書かれている場合もあります。

中見 というのは、この最後のあたりについては全然知らないですが、ある特定な時期ですが、女性秘書がいたようです。これはすごい秘書で、横浜正金のときからの秘書のようですけれども、木内さんにほれ込んで一緒にやめて、死ぬまでついていた人がいたようです。その人がそういうマネージメントの管理をやっていたという可能性はあります。

矢野 例えば論文集として。

中見 それは私は知りません。私は本当に間接的なことで会って、背の高い非常に品のいいおじいさんでしたが、その程度の知り合いです。赤坂にお屋敷が、お屋敷といってもたいした家ではないけれどもあって。道場というのは僕もきょう初めて聞きましたけれども、それは亡くなってから、あるいは最後のほうに勝手にやっていたわけでしょうね。それから人間関係で、渋沢敬三の奥さんは木内信胤の妹で、ところが離婚しちゃうでしょう。戦後、大蔵省に一時いたというのは明らかにその関係です。渋沢が大蔵大臣になったから。

矢野 あと、お兄さんの良胤さんが外交官で、その友人が渋沢敬三ですよ。

中見 フランス大使をやった人はその息子でしょう。みんな胤がありますね。それから、これはそれこそ伊藤先生にお調べいただくといいのですが、木内文庫というのがかつてあったのだそうです。韓国研究院というところに。

伊藤 それは、崔書勉という人が韓国研究院というのをやっていて、いま僕が行っている木内を中心とした会に彼も出ているんです。

矢野 実はあんまりそういうことをいってはいけないのですが、とにかく一部のグループからは、いってみればどちらかという進歩的な人からみると崔書勉はやはり非常に評判悪くて。木内の文書の中に崔書勉を誹謗するようなこういうものが出たというので、木内さんが持っていたわけですよ。崔書勉とのやりとりの手紙、それから崔書勉のことにする噂話、そういったものもあります。具体的に、木内さん自身は韓国研究院にもものすごく深くコミットしている、その関係の史料もあります。それ以外にも、日韓協力委員会というのですか、それが1969年11月に創立されるのですが、この創立に実は参画して、常任委員として、特に経済部会の指導をしたのが木内さんらしいのです。だから、そういう関係から崔書勉と交流を持っていく。

中見 韓国研究院ができたところに、木内文庫として寄付したようです。そのなかに太平洋問題調査会の史料があって、原覚天さんの『アジア研究史』では、それを使っているんです。その研究院というのは解散するでしょう。

伊藤 まだあるみたいなのですからけれども、かなり売り払ったのですかね。

中見 そこに木内文庫なるものがあって。もうひとつ伺いたいのは、まさにこの木内さんというのは、戦前からのリベラリストの渋沢さんなんかと関係のあった国際経済人の走りであると同時に、逆に台湾・韓国ロビーですよ。そっちのほうの史料というのは結局どうなっていますか。文書やそういうものはどこにあるとか、複合的に調べられてみるといいのではないかなと思いますけれども。

矢野 木内さんが自分の業績を外務省に出したものの、僕はその史料でいろいろしゃべっていたのですが、木内さん自身がお書きになった外務省参与としての業績というのが実はあります。その中に出てくるのが、台湾政府の招聘によって台湾各地を視察して、事細かに調査して成果を公にしたりとか。あるいは、1963年5月以来、日華協力委員会の委員となって活動する。共同声明なんかも起草にあたったということを書いています。あと先ほど申し上げた日韓協力委員会ですね。そういうことを主に自分は参与の時代はやっていたんだということを書いています。木内さんの文書の中に、日華協力委員会の関係の、第何回かちょっと忘れましたが、議事録みたいなものとか。だけど、これはきちっとした冊子になっていますので、ほかでも見られると思いますが、若干入っています。文書を全部見たわけではないので、点数的にはどれくらいあるのか、先生が目録をもう一回ごらんになられると僕のほうも助かるのですが。崔書勉の関係の韓国関係の史料も、私信も含めて、内部情報を事細かに綴ったような史料も残っています。

伊藤 どこから話していいのかよくわからないけれども、多分、崔書勉が預かったという木内文庫なるものは、木内文庫というのがちょっと古本屋に出たりしているという噂がありますので、

売られたのかなという感じは持っていますが、いまでも崔書勉に会うと韓国研究院の理事長か何かの名刺をくれます。だから、やっていることはやっているのだと思います。いまの中見さんのお話で……、そうだ。僕は世界経済調査会を調べ始めて、中見さんの奥さんが世界経済調査会で研究員をやっていたという話を聞いて、奥さんに取材をいたしまして、それで服部礼次郎に会ったり、いろいろなことをやりました。だけど、そこから木内さんに直接は結びつかないで、別なところで木内さんにポンとつながったということがあった。だけど、とにかく木内、木内と思ったので、それで朝日のやつに木内という指名をしたわけです。

矢野 北朝鮮で、『朝鮮日報』だか、『労働日報』だかちょっと忘れましたが、北のほうが出している日本語で書かれたもの、これは国内で出しているものだと思いますが、そこでたしか崔書勉を大々的に批判する記事があったと思います。何気なく読んでいたら、ポンと木内信胤の名前が出てくるのですね。木内さんのことはそんなに批判はされていないのですが、崔の活動の日本協力者に木内というのがいると一言ぼろっと出てきて、それが木内さんは気になったのか、とって置いたのだと思います。

伊藤 韓国では、いろいろな批判とか何とかというのは、崔書勉を支持している人もたくさんいるわけだし、批判しているのもたくさんいる。これは反共だからいけないといったら、僕も含めて崔書勉一派なんですね（笑）。やはり、人柄的にちょっと問題があるのではないかという感じは、ちょっと会って感じます。だけどやはり、彼はときどきスピーチをやりますけれども、非常にいいスピーチをしているので、私は、この人はいろいろな側面があるのだらうなと思います。

私が崔書勉とどうして知り合ったかといいますと、実はそこで知り合ったのではないのです。昔むかし、私が学生諸君を連れて韓国に行きました。韓国へ行きましたら、姜昌一という学生、彼が僕のゼミに出ていたものですから、彼が濟州島で迎えに来まして、そこで崔書勉を僕に紹介したんです。それで、崔書勉が我々一行を招待いたしまして、濟州島の KAL ホテルか何かでキーセンを呼んで盛大な宴会をいたしました。そのときに、奥さんのいる前でキーセンとキスをしたり、ちょっと怪しい人間だなと思っておりまして、また木内さんの会で会いまして。けどまあ、非常に丹念に史料を集めているようでありまして、国会図書館憲政資料室なんかにも彼はずいぶん行っているのですね。そこでいろいろ調べたりしています。ちょっとおもしろい人物であらうかなと思います。

さっきの日韓協力委員会ですか、あるいは日台もあるのですが、これはみんな矢次（一夫）とか岸（信介）さんがかかわっておりまして、おそらくその線だろうと思います。

矢野 ちょっとその説明をしますと、このままなのですが、「1964年6月、同志6名と、高山岩男、中村菊男、鍋山貞親、松下正寿……」、みんな民社系ですけども、「矢次一夫の諸氏とともに中国周恩来首相に公開状を送り、ついでその内容と次第等『経済往来』誌上に発表して国論の啓発をはかった」と書いてあります。

伊藤 つまり、あんまりそういうことで偏見を持たないで史料を読んでいただければなと思います（笑）。人間活躍しますと、いろいろあるわけでありまして。私も、伊藤一派を追放しろというふうな、派をなしていると目されておりまして（笑）。実際、派はないと私は思っておりますが。

派の仲間として有馬君なんか名前が挙がっておりますけれども、ろくでもない派であります。そんなことですので、崔書勉の問題はどなたかおもしろかったら調べてみてください。

矢野 興味のある方は。

伊藤 おもしろいですよ。崔書勉はまだ生きていますので（笑）。

佐道 矢野さん自身は、木内さんの研究者では全然なくて、これの整理をされたということできょうお話いただいているのですけれども、全体像についてもいちばんご存じだと思うので、目録とかをまだごらんになっていない方で何かご質問とか。

矢野 きょうは佐藤純子さんがいらっしゃっているのですが、実は佐藤さんと僕は打ち込んだ点数ではおそらく半々くらいになると思いますので、僕以外の箱のことでも、佐藤純子さんはかなり詳しいので、僕がフォローしきれない部分は佐藤さんから何かお答えできると思いますので、何か付け足すこととか。

伊藤 いろいろな史料があって、ずいぶん前に整理したので忘れていたのもあったのですけれども。私がやった中では、やはり外為関係と財閥解体のところが多かったです。

伊藤 外為委員会の議事録というのは、多分ここにしかないのではないかなと思います。あれは機会があったら報告したいと思っています。

小池 津島寿一文書の中に外為関係が一部あったように。

佐道 確かにあったね。

小池 財務省の財政史料室に先輩文書として津島寿一文書がありますが、そのなかに津島側で整理した冊子、目録があったような気がします。これは伊藤先生に聞いたほうがいいのかもかもしれませんけれども、箱に入れていく前は、どういう状況だったのでしょうか。もうひとつは、先ほど中見先生がおっしゃられたように、ある程度整理をされて置いてあったのか、それとも雑然としていたのでしょうか。

伊藤 それはお答えいたします。僕はあなたにリストを渡したよね。

矢野 ええ、伊藤先生がお書きになった最初のリストですよ。はい、いただきました。

伊藤 僕もはっきり覚えていないのですけれども、途中までは箱にもう既に入っていたと思います。それをそのまま持ってきた。

矢野 基本的に、伊藤先生がつくってくれた順番どおりにこの30何箱というのはなっています。

伊藤 それからあとは、僕は机の引き出しとか、その中に山積みになっている史料をダンボールに詰めたということです。

井口 外為管理委員会の関係ですが、その前の段階です、GHQ、ESS とのやりとりとか、そういった文書もかなりあるのでしょうか。

矢野 それがかなりのものだと思います。これは読み応えがある。

井口 ベーカーやアリソンと。

矢野 はい、かなり出てきます。ESS のものがほとんどだと思うのですけれども。もちろん金融・為替の関係なので。これはどうなのでしょうね。例えば国会図書館でその関係のものを見るよりも、これでまずあたりをつけて、補うというほうが効率的ではあるかもしれませんね。

小池 しかし、それはここで「書簡」という形の中に分類されているのではないですか。往復関係で。

矢野 そうなんです。それはちょっと注意していただきたいのですが、「書簡」というふうにとったものに関しては、小池さんがまさにおっしゃられたとおりで、「拝啓」「敬具」で始まっているものは、日本文、英文に限らず「書簡」でとっていますので、その一件の中に書類的なものと書簡等が混じっています。木内の目録を見ると、特に1箱から16箱のGHQ関係は、書類とともに書簡を見ていただきたいです。普通だったら「書類」のほうに分類されている史料を、形式論から「書簡」のほうに分類していますので。

小池 来往関係でしょう。日本政府とGHQのESSとの来往関係が「書簡」という形でこれでは分類されるということですね。

矢野 そうです。見ていただければと思います。ほとんど1箱から16箱の外為の関係とかGHQの関係がありますけれども、英文の史料がかなり。大半が英文です。物としては、本当にパラパラのパラフィン紙みたいなものがありますよね。あれにタイプで打っているやつですから、原史料そのものなんです。僕はあのころの原史料というのはあまり見たことがないので。

井口 わら半紙みたいな。

矢野 そうです、そうです、わら半紙みたいなやつですね。

井口 状況は結構いいのでしょうか？

伊藤 わら半紙というよりも、もうちょっと強い紙ですね。

矢野 そうですね。

井口 黄ばんだ感じになっちゃうのですね。

伊藤 いや、黄ばんだ感じではないでしょう。

矢野 もう月日がたったので黄ばんだというだけの話だとは思いますが。

小池 A4版の大きさ？

矢野 ええ、A4版です。

伊藤 A4じゃないですよ。あれはB版だったと思いますけれども。

小池 日本のB版？

伊藤 うん。

矢野 あれ、そうかな。この大きさ……。

小池 議事録。

矢野 あ、議事録はそうです。

伊藤 それに和文タイプで打ってある。おそらくあれは複数つくったと思いますけれども、ちょっとよくわからないですね。カーボンで打っているかもしれない。なんとなく単独のような気もするのですが、タイプで打ったという感じで。薄い紙ですから、多分あれは複写というか、中にカーボンを入れて何部かタイプで打ったと。

矢野 ただ、文字を読むぶんに関してはかなりきれいに読めると思います。かすれちゃっているというのではなくて、その点はあまりご不自由をかけないとは思うのですけれども。

伊藤 あれはきれいですね。議事録は。

小池 議事録には必ず配布部数と配布番号が載っているものですが、そういうのはあったのですか。

矢野 そういうものも、書かれているものと書かれていないものが。

伊藤 あれは議事録には入ってないですね。

矢野 入ってなかったでしたかね。何部のうちの幾つと、よくありますよね。

武田 大森とく子さんのあれのときにもお話しがあったのですけれども、大蔵省の中で財政史室が関係者にインタビューしたものがあって、全部で8冊なのですけれども。それは多分、東大の経済学部にもあるのですけれども、僕が都立にいたときに都立の付属図書館に入っていて。その中に木内が外為委員会のときのことをしゃべって、3回シリーズで。ほかのものと違うのは、この内容は論争のために話したのではないという但し書きがついていて。かなり内容は論争的なんだけど(笑)。内容を読んでもおもしろいのですけれども、論争的なのかどうかちょっといまいちわからないところがあるんです。

伊藤 どういう論争かわかりませんが、かなり突っ込んだ話をしているんですよ。あれは、外為は行政委員会としてできていますので、大蔵省との管轄争いが猛烈に激しいので、そのことが如実に関係の文書の中にいろいろなところに出てくるのですね。

矢野 その点に関しては、これはどうなのでしょう、もし生きていたらどうかなというような具体的な名前を挙げて、書類の中に、要するに木内さんに賛同すると思われる方との手紙というのではないのですが、メモ書きみたいなものでばらっと入っているのですね。いまの形勢がどんな感じとか、その点のリアルなものも実は入っていて、エッと思っちゃったのですけれども。それは若干ありました。内部情勢がよくわかるようなもの。多数派工作も含めて、いろいろやっているんだなと思われるものが書類の中に挟まっていました。

伊藤 占領の終結とともに外為は委員会廃止になって、大蔵省の傘下に入っちゃうわけですね。

矢野 そのとき、確か木内さんは外為の廃止には反対だったと思います。その関係の史料もあります。

伊藤 だけど、その関係でやはり大蔵省とそのあとも付き合っているわけですね。

矢野 だから、大蔵省……。

伊藤 外務省。

矢野 外務省、あと安本、あのへんがみんなごちゃごちゃと絡んで出てきます。

武田 このときの史料を見るのは、オーラルの速記録は役に立つと思います。

伊藤 うん、それは非常に役に立つと思います。あれはやはり関係者を前に話しているから、僕らが読んでもよくわからない。やはり外為のシステムというのがよくわかっていないと、あれはせつかく詳しい話をしているのだけれども、これはどういうことなのかなと。

佐道 わかっている人同士で話しているわけですね。

伊藤 そうそう。

井口 それは大蔵省の財政史室で閲覧可能ですか。

伊藤 あれは外郭団体がやったんじゃないか？

武田 そうだ、ごめんなさい、財政史室ではないですね。金融財政事情研究会と官房の調査部。タイトルは『戦後財政史口述史料』といいまして、都立大学にたまたま8巻あって、大森さんの話を聞いていたら、8巻で全部だということがわかったのですけれども。全体のコピーはとってあるので。中には、宮沢さんの東京・ワシントンの密談のある部分がそっくり書かれていたりして。あ、このへんが種本である本ができたんだなど。渋沢敬三のあれもあるし。

伊藤 さっきの渋沢の話ですが、たしか若いときに、自分が正金に入るかどうかと考えたときに渋沢に出した手紙の控えがあったでしょう。

矢野 たしかあったと思います。木内自身は本当は学者になりたかったという話ですよ。

伊藤 そうです。それで非常に迷って、敬三さんに相談したんですね。ですから敬三さんとの関係というのは昔から非常に深い。それで渋沢さんの MRA (Moral Re-Armament) だけ、道徳再武装。あの人はなんていったっけ。

武田 渋沢雅英さん。

伊藤 あれは多分。

武田 あれは木内さんから紹介された。

伊藤 そうですね。それも話を聞いたらどうかといわれているのだけれども、余力がないので困っているのです。

武田 この本にもインタビューが出ていて、ロバーツとデイビスどちらかに。

伊藤 この人は、MRA というのは明らかに CIA だろうということを書いていて。非常におもしろい。

井口 カーンに訴訟されているのですかね。カーンはおとし死んでしまいましたが。

伊藤 この人は、出典を見ていて、どこというのを書いてないもののがかなりあるから。カーンの文書がずいぶん引用されているのでしょう。

武田 カーンの書簡が。

伊藤 あれは、ダレス宛のものとか、いろんな人が。それから、カーン自身の文書もなかったかな。

武田 カーン自身の文書はなかったんじゃないですかね。

伊藤 僕は、カーンとかパケナムとか、これも昔むかし岸さんのオーラルをやったときに出てきて、「エッ、これは何者だ」というので非常に興味を持っていたら、またいろいろなところにつながってきたという感じです。

小池 それで、先生がインタビューされているときに、文書が。

伊藤 そうです。最近、原彬久さんが、僕やっただいぶあとに岸さんのオーラルをやって、それを本にしました。ちょっとパラパラと見たのですけれども、あれもカーンがだいぶ出てきています。パケナムと。

それから、いい忘れましたが、渡辺武さんのオーラルをやったと先ほどいいましたけれども、そのうち冊子になって出ます。これは皆さんに差し上げるつもりであります。その中で、渡辺家

が戦前アメリカ大使館の人たちを非常によく世話したみたいなんです。渡辺さんのお母さん、千冬夫人だと思います。それで、渡辺家にはキャッスルとかドゥーマンとか、ああいう人たちがだいたい出入りしていたということです。渡辺武さんはその縁もあっていろいろ戦後活躍していたと思います。このロバーツのあれによりますと、アジア開発銀行や何かいろいろまた絡んできて、という話になります。渡辺氏がオーラルでいったことはここに書かれていることとかなり似ているのですが、基本的に何とかロビー、ジャパンロビーといわれているけれども、べつに日本人がアメリカに働きかけるためにつくった機関ではない。アメリカ人がアメリカのためにつくった機関である。自分としては、この人たちと非常に親しかったけど、べつにそのために何かを大いにやったというわけでは必ずしもないという言い方をしておりました。でも、やはり非常に好意を持って付き合ったことは間違いないので、『渡辺武日記』にたくさんその人たちの名前が出てくる。僕は、もう一度ここで読み直して、一度報告したいと思います。

時間もだいぶたちましたので、次回のことなのですけれども、いままで木内の文書をごらんになっていたのは、いちばんは河野さんですので、河野さんがごらんになったところで、狭い窓からでもいいですから、何か紹介的な話でも結構ですので、お話しいただければ大変ありがたいと思っております。

河野 狭いところからでよろしいでしょうか。

伊藤 ええ。これは広いところなんていったら大変ですから（笑）。何しろ目録があれだけの厚さなので。大学の資料整理室に行きますと、データベースというわけではありませんけれども、打ち込んだのはあります。あれは全部つながっているわけではありませんけれども、検索をかけようと思えば検索がかけられますね。

矢野 ええ、箱ごとにエクセルでキーワードを入れて、あるいはその書類だけを出すと、できますので。

伊藤 ですから、何か特定なことをちょっと調べてまとめようと思ったら、いらっしゃれば、それで検索ができます。いずれデータベースとして大学のホームページにぶら下げようと思っておりますが、ちょっとそれには手間隙がかかりますので、いまのところはそうして検索してみてください。

佐道 次回の日程を原則的に決めますか。これだけの方が、もちろん全員ではないかもしれませんが、調整というところかなり大変になるので、一応、原則的にこのあたりでということを決めて、あとでまた出欠のご確認をするということはどうですか。

伊藤 やはり一ヵ月後くらいに設定してみたらどうでしょうか。曜日は、きょうは何曜日ですか。

佐道 きょうは火曜。例えば、毎月第二火曜とか第一火曜とかにするとか。きょうは第一火曜日。

伊藤 それでは非常に具合が悪いという方はいらっしゃいますか。やはり昼間からやるわけにはいけないので、こういう時間になります。それで、必ずご案内とともにご返事をいただく。ご返事をいただかないと食事の支度ができませんので。食事をしてから集まってくださいという大変な時間になりますので、やはりここで食事をして、それで会をやるということにしたいと思っておりますので、必ず出欠を出してください。

佐道 一応、これだけの方がきょう。

伊藤 皆さんに必ずご連絡を差し上げますので、というふうにご了解ください。一応、この研究会はオープンな研究会にしたいと思っておりますが、場所的に、きょうが限度ですね。これ以上人がふえたらちょっとやっていけないという感じですので、もしまだ参加したいという方がいらっしゃる場合には、どこか場所を考える。ただ、ここは便利だと僕は思うんです。この近辺で大きな場所を探すということになるかと思いますが、場所代も要りますからね。

佐道 ちょっと不便ですけども、補助椅子を出して、あと何名かとなるかもしれません。

伊藤 ここで収容できる範囲でやれるうちはここでやりたいと思います。できないときには場所を考えるというふうにしたいと思っています。

佐道 では、遅くまでどうもありがとうございました。

(終了)